

明治期輸出陶磁に見る「薩摩現象」と変容
—沈壽官、錦光山宗兵衛、宮川香山を中心に—

盧 ユニア（ソウル大学日本研究所）

明治期輸出陶磁のうち薩摩焼は、鹿児島に限らず、京都や横浜など日本各地の窯業地で盛んに生産された。「京薩摩」「横浜薩摩」などを含む総称としての「薩摩焼」は、素材技法にもとづく概念であり、白薩摩の生地に細密な上絵で文様を表し、さらに金彩で華やかに装飾を施した金欄手の製品を指す。これらは基本的に国内向け製品ではなく、海外輸出を前提として生産された点に特徴がある。京都や金沢など伝統的な窯業地でも生産され、「SATSUMA」というブランドで輸出しており、明治期において「薩摩」という名称には、「京」や「九谷」以上の付加価値があったことが窺われる。

このような状況をふまえて本発表は、京都と横浜を中心に日本各地で薩摩焼の生産が活発化した「薩摩現象」とみなし、その現象を総合的に分析するものである。発表の手順としては、まず時代背景を検討しながら、各地の競争と分業体制整備の様相を考察する。そのうえで鹿児島の「本薩摩」における沈壽官(12代、1835-1906)、「京薩摩」における錦光山宗兵衛(6代、1823-1884)(7代、1868-1927)、「横浜薩摩」における宮川香山(初代、1842-1916)を考察の対象とし、輸出拡大にともなう競争のなか各地でどのような変化が起きたのか考察し、結論とする。

明治維新と廃藩置県にともなう藩窯の廃止、パトロンの喪失など、目まぐるしく状況が変化するなか、海外市場への注目が高まった。もっとも早く販路を開拓した旧薩摩藩が、西南戦争によって生産基盤を失うなか、輸出港が近く絵付師が豊富であった京都や横浜での生産量は飛躍的に増加し、さらに絵付けを専門にする工房も生まれながら、生地づくりと絵付けの分業体制が確立していった。

また、明治初期にはそれぞれ共通する様式の製品を作っていた陶工たちは、競争の中で互いに刺激を与えながら、独自の世界を展開していった。沈壽官は、白薩摩の生地がもつ温和な美しさを生かす「透彫」や「浮彫」のような彫刻装飾に力を注ぐ。いっぽう錦光山宗兵衛は、水金(みずきん)の新たな使用法を開発し、絵付け装飾に力を注ぎ、日本最大規模の生産量を誇るようになるが、1900年のパリ視察をはじめ、浅井忠の遊陶園に参加しながら、図案の革新を図る姿も見える。また宮川香山は、陶器の表面をリアルな浮彫や造形物で装飾する「高浮彫」を開発し、写実的かつ装飾性の高い陶器の生産に力を注ぐが、明治10年代半ば頃からは新たに釉薬と釉下彩の研究にも取り組んだ。このように3人の方向性はそれぞれ異なるが、時代が様式の変化を求めるなか、絵付けからの脱却という結果につながった。以上のように各地の「SATSUMA」は、各地での時代的または資源的条件(人材、情報、化学技術などを含む)を反映しながら、徐々に初期の姿から変容していったことが分かる。